

06・クロエはわたしに甘すぎる

本編05『さんざん乳搾りされて遊ばれた後にいちやあま貝合わせセックス』から数時間後。
とある年の晩秋。二十三時すぎ。

場所は主人公とクロエが暮らす家の寝室。

天気は雨。室温は二十四度。

主人公とクロエ、裸でベッドに入り、寝そべっている。

SE1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【0—7秒ほど流してSE2】

【建物の中から、外の音が聞こえる】

【その後、音量が小さくなる】

【ごく小さな音量で流す】

【場面転換するまで流し続ける】

SE2　主人公がベッドで動く音

【最初から最後まで流す】

●正面 30センチ

「少し眠そうな、ぼーっとした声で。
つい先ほどまで眠っていたので】
あー……。凄い寝ちゃったね。
もう夜中だあ……。

【それでも楽観的に。眠つてしまつた者はもう仕方がないので】
まあ、いつか。こういう日もあるよね】

△主人公

「そうかしら……」

主人公、クロエの言葉に、少し納得が行かない様子で答える。

今日は本当に何もせずに一日が終わつてしまつた気がする。

いや、散々いやいやは、いやいやだけはしたわけだが……。

●正面 30センチ

「【優しく楽観的に。『時にはこういう日があつてもいいだろう』と思つてゐるのでいいじゃん。たまには。

明日からはまた頑張るわけだし、今日はまだゆつくりしてようよ♥」

〈主人公〉

「……もう。

クロエちゃんは、わたしに甘すぎるのよ」

●正面 30センチ

「【ちょっと納得が行かない、という感じで。

クロエ自身意外なので】

えー？」

そう。 そうなのである。

主人公、

言われたクロエさん自身にはまるで自覚がないようだけど……クロエはわたしに甘すぎるのよ。

わたしは、もつといつでも厳しく己を律して。高い目標を掲げて生きていこうと思っているのに……。実際にそれができているかどうかはさておき、クロエはいつもわたしを甘やかすの。

『今まで十分だよ』って言うみたいに、ダメなわたしでさえ肯定してしまうのよ。

と思いながら、クロエを見上げる。

するとクロエは目を泳がせ、何だか恥ずかしそうにした。

どうやら完全に自覚がないわけではないようだが、指摘されるとばつが悪いらしい。

正面 30センチ

「もごもごと恥ずかしそうに言い訳をする。

その自覚はなかったので

あつ……甘い、かなあ……？

したい事してたらこうなつちやつたから……。

ちよつと、わかんないかも。

〔少し間をあけてから。〕

〔優しい声になつて〕

〔でもね〕

S E 3 クロエが主人公の背中を『ぽん、ぽん』と撫でる音
【最初から最後まで流す】

クロエ、『左 0センチ』に移動して話す。

●左 0センチ

【優しく。クロエの本音を述べる】

あなたには、甘過ぎる人がいる位が、きっと丁度いいんだよ。

【※1回※ 耳にキスする】

ちゅ。

【とても優しく。主人公を安心させるような声で】

それに……。

あたしだけは……いつでもあなたの味方で。

絶対に優しくする人でいたいからね♥』

（主人公）

「……！」

だが、指摘を受けてなお、クロエはこのスタンスを貫くようだ。

それは主人公にとつてとても恥ずかしく、時に申し訳ない事でもあるが……それ以上に幸せすぎる事だ。

どんな自分でも受け入れてくれる人がいる。そう思うと……『どんな事』は無理でも、やれるだけの事はやってみたくなるのだ。

クロエ、『左 0 センチ』に移動して『無聲音ささやき』をする。

●左 0 センチ 『無聲音』ささやき ※マークのセリフまでささやく
「そっとささやく。
甘くそっと、ささやく」
大好きだよ」 ※

S E 3 クロエがベッドで動く音
【最初から最後まで流す】

クロエ、一度少し離れる。

●正面 30センチ

「優しく、ゆっくりと」

「じゃあ……もう一回寝ちゃおつか」

SE4 クロエがベッドで動く音

【最初から最後まで流す】

クロエ、『左 0センチ』に移動して『無聲音ささやき』をする。

●左 0センチ 『無聲音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「そっとささやく。

甘くそっとささやく】

おやすみなさい……



クロエが耳元で優しくささやく。

主人公は素直に頷くと……今日という日をここでおしまいにするように、眠りへと落ちていった。

ここでフェードアウトして終了。